

はばたこう 明日へ



巻頭言

「特別の教科 道徳」の 船出にあたり ②

貝塚 茂樹 武蔵野大学教授

実践事例1

自分事としての活動と 構造的な板書をねらった、 道徳授業の実践例 ④

佐野 雄一 愛知教育大学附属名古屋小学校教諭

教科書活用力を高める ⑧

鈴木 健二 愛知教育大学教育実践研究科教授

実践事例2

多面的・多角的に考える道徳授業 KJ法と板書の構造化をとおして ⑫

鈴木 一禎 静岡県浜松市立伊目小学校教諭



「特別の教科 道徳」の 船出にあたり



かいづか しげき
貝塚 茂樹

武蔵野大学教授

「考え、議論する道徳」の意味を確認する

小学校で「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と略）が開始されて半年が経過します。全国の約640万人の児童が教科書を使用しての授業を受けています。来年度からは、約330万人の中学生に向けて道徳科の授業が開始されます。道徳科の設置が道徳教育の歴史の中で大きな転換点となることは確かです。

道徳科の設置によって、「考え、議論する道徳」を旨とした実践が全国の教室で模索されています。特に、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議報告」が提示した、①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習、②問題解決的な学習、③道徳的行為に関する体験的な学習、という三つの「質の高い多様な指導法」を中心として多様な指導法の実践が試みられています。

ところが、その一方では少し気になる点もあります。それは、ただ教科書をこなすだけの授業、ペアやグループで話し合いをするだけに終始した授業が少なからず見受けられることです。また、安易に授業の「型」（How to）を求め、評価についても抽象的な「模範文例」をなぞるだけの、いわゆる「コピー」の一般化も心配されます。

しかし、こうした授業が、道徳科の目指す「考え、

議論する道徳」の対極にあることは明らかです。2014（平成26）年10月の中央教育審議会答申は、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」と明記しました。そして、こうした資質・能力を育成するためには、一人一人の児童生徒に自分ならどのように行動・実践するかを考えさせ、自分とは異なる意見と向かい合い議論する中で、道徳的価値について多面的・多角的に学び、どのように実践へと結びつけるかという指導が必要であるとしています。簡単にいえば、これが「考え、議論する道徳」の視点であり、定義といえます。

「考え、議論する道徳」は、従来のように読み物の登場人物の心情を読み取ることに重点が置かれた授業や、児童生徒に望ましいと思われるわかりきったことを言わせたり書かせたりする授業からの脱却を明確に求めるものです。それは、「主体的・対話的で深い学び」を実践するための道徳科における授業改善の視点と言い換えることができます。

その意味では、2016（平成28）年12月の中央教育審議会答申が、「主体的・対話的で深い学び」とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもないとしたうえで、「人

間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである」と明記していることを改めて確認する必要があります。

つまり、「考え、議論する道徳」の授業は、特定の「型」(How to)を求めるものでも、また三つの指導法のどれかに当てはめればよいというものでもありません。このことは、「専門家会議報告」が、三つの指導法が独立した指導の「型」を示すわけではなく、それぞれの要素を組み合わせた指導を行うこともできると指摘していることから明らかです。重要なことは、教師一人一人が、児童生徒の発達の段階や特性、指導内容などに応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら工夫して実践することです。

道徳科の目標から演繹して考える

2016(平成28)年12月の中央教育審議会答申は、指導に生かす評価を充実させる「指導と評価の一体化」を提起しています。では、道徳科において「指導と評価の一体化」を実現する視点はどこに置けばよいのでしょうか。端的に言えば、指導法も評価も道徳科の目標から演繹すればわかりやすいでしょう。

周知のように、道徳科の目標は、「…道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。()は中学校」とされています。ここで特にキーワードとなるのは、「自己を見つめ」と「多面的・多角的に考え」ということです。この二つは、指導と評価の共通した視点と考えることができます。

つまり、道徳科では、この二つを実現する効果的

な指導が求められると同時に、評価については、①他者の考え方や議論にふれ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、②多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかということが、評価のポイントと考えられます。

その際、実際の授業において特に重要となることは、授業の「ねらい」を明確に書くことでしょう。基本的には、「～(教材)をとおして、～(活動)し、～(道徳性)を育てる」と書くことが最低限求められ、それによって教師の授業に対する目的もはっきりすることになります。「ねらい」が決まれば、指導法が決まる。「ねらい」と指導法が決まれば評価のポイントが決まります。

まずは、「DCAP」の実践から

教育の指導の効果を上げるためには、指導計画の下に、目標に基づいて教育実践を行い、指導の「ねらい」や内容に照らして児童生徒の学習状況を把握するとともに、その結果を踏まえて、学校としての取り組みや教師自らの指導について改善を行うサイクルが重要です。この計画(Plan)→実施(Do)→評価(Check)→改善(Act)というPDCAサイクルは道徳科においても重要であることはいまでもありません。

しかし、道徳科は新しい教科であり、歴史も教育実践の蓄積も十分ではありません。したがって、道徳科では、実施(Do)から始めるつもりでもよいのではないのでしょうか。まずは授業をやってみる。そして、そこでの課題を次の授業改善につなげていく。こうした授業改善の繰り返しの蓄積が道徳授業の質を向上させ、本来的なPDCAサイクルを実現する基盤となるはずで、失敗を恐れることなく、まずは「DCAPサイクル」を念頭に積極的に果敢に挑戦する道徳授業を期待したいと思います。

自分事としての活動と 構造的な板書をねらった、 道徳授業の実践例

さの ゆういち
佐野 雄一

愛知教育大学附属名古屋小学校教諭

I 主題名 「友達と助け合って」
内容項目 [B-9 友情, 信頼]
教材名 「仲間だから」(教育出版 4年)

II 立案の立場

① 本時で扱う道徳的価値について

本教材を扱うにあたり、「仲間」という言葉の意味を調べてみると、広義のものから狭義のものまでさまざまな意味のものがあつた。その中で、「心を合わせて何かを一緒にするという間柄をかなりの期間にわたって保っている人。そういう間柄。」というものが、授業者である私にとって最もしっくりくる意味であつた。それに対し、「友達」は「一緒にいて楽しい」と感じる間柄であると捉えている。「仲間」とはその関係を徐々に構築していくものであり、「今日から友達」はあつても「今日から仲間」はないのではないかと考える。そして、内容項目「友情, 信頼」を本教材に照らし合わせて考えたとき、その場で一緒に楽しく過ごす「友達」ではなく、一年間を通して築いていく「仲間」として捉えていくべきであると考えた。

児童にとって、学級の仲間は長い時間をともに過ごす、深い存在である。その相手の心情を考え、自分にどのようなことができるのかに気づき、行動に移していく。それを繰り返していくことによって、関係が深まり、仲間としてより成熟していくことができるはずである。

中学年の段階においては、活動の範囲が広がる中で、相手の気持ちを察知したり、相手のおかれていた状況を理解したりすることができるようになってくる。指導にあたっては、特に相手のことに気づき、理解できるからこそ、自分自身にどのようなことができるのかということ念頭においた言動が求められる。そこで、本教材をとおして、「仲間になるとはどういうことか」を十分に考えさせ、その関係をよりよく構築するための行動をしようとする実践的な態度を育みたいと考えた。

② 児童の実態

本学級の児童は、男女の境なく、休み時間には仲よく遊ぶ姿を見せていた。困っている友達がいれば、助けの手を差し伸べることもいとわない様子であつた。しかし、それはあくまでも「自分と相手」という狭い関係を複数築き、その中で成立しているだけで、「学級」という集団としての意識はあまりもてていないようにみられた。そのため、ふだんの時間

と一緒に過ごしているかといった、仲のよさに左右されてしまう姿も多くみられるのも実態であった。

そこで、これまでに得てきている、「友達と仲よくし、助け合う」という道徳的価値の理解をもとにして、学習の中で他者との意見や考えの交流を行い、多面的・多角的に見つめ直したり考え直したりする。それによって、「仲間になるために大切なことは何か」という課題について、相手の思いに気づき、どのように対処することが「仲間」という関係を構築していくことにつながるのかを考えて行動すべきであるという、より確かな道徳的価値の理解がなされると考えた。そして、より確かなものにした道徳的価値の理解を自分自身のよりよい生き方と照らし合わせ、自分の言葉で表現し、捉え直していくことで、学級集団としての仲間意識をもたせ、「友情、信頼」という内容項目についての道徳的な判断力、心情、実践意欲や態度を育てたいと考えた。

③ 教材について

本教材は、いつもクラスメートが飲んだ牛乳パックを片づけるたくやと、それに違和感を覚えるゆいを中心に話が展開する。序盤では、ゆいが思わず「なんでいつもそうなの？」と声をかけるが、たくやには何も返事をもらえない。そこで、ゆいは両親に相談をし、たくやの「本当の気持ち」をきいてあげるべきだというアドバイスをもらう。ゆいが悩んだ末に、翌日思いきって声をかけると、たくやからは「いいんだよ」「ああでもしないと仲間に入れないから……。」といった言葉が返ってくるが、裏腹に、たくやは目に涙を浮かべて走り去る、という内容である。

この教材を用い、登場人物それぞれの立場や思い、そのときの行動について、意見や考えの交流を行い、楽しく過ごす「友達」という関係だけでなく、学級集団としての「仲間」という関係を築くにはどの

ように考えるべきか、どのような言動をするべきかなど、多面的・多角的に見つめ直したり考え直したりすることをおして、「友情、信頼」という内容項目についての道徳的価値を理解することができると思った。

Ⅲ 授業展開のポイント

「仲間」という言葉の辞書的な意味から、「自分たちもこれから仲間になっていくのだ」という自分事としての活動を促す。また、教材の読み取りを「気づき」と「行動」に分けて行い、構造的な板書により登場人物の心情の移り変わりをより強く実感できるようにする。さらに、授業の最初と最後に同じ発問をすることにより、本授業をとおして自分の考えにどのような変化が起きたのかを客観的に捉え、実感できるようにし、これからの自己の生き方に生かせるようにしていく。これらをポイントとし、授業を行った。

Ⅳ 評価

- 「仲間」になり、信頼し、助け合うことが大切であるということを理解しようとしたか。(道徳的価値の理解)
- 自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える中で、相手の気持ちに「気づき」、相手のことを考えた「行動」を重ねることの必要性について考えようとしたか。(多面的・多角的に考える、自己の生き方について考える)
- 自己の生き方についての考えを深める学習をとおして、これから自分たちが「仲間」になっていくために必要な道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を身につけようとしたか。(道徳性)

V 本時の展開計画

段階	学習活動・主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1 道徳的価値に関する発問から、この時点での自分の考えを書く。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">仲間になるために大切なことはなんだろう</div> <ul style="list-style-type: none"> みんなで力を合わせることを。 仲よくすること。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの生活や学習の中で身につけている道徳的価値の理解について確認する。
展開前段	2 「仲間」という言葉についての理解から、自分たちの現状について捉える。 3 教材の内容および、登場人物の心情や状況について把握する。 ○ 「仲間だから」というタイトルは、主人公のゆいさんの誰に向けた言葉なのですか。 <ul style="list-style-type: none"> ゆいさんの、たくやさんに対する言葉。 ○ 「仲間だから」に言葉を続けるとしたらどのような言葉ですか。また、なぜそのような言葉が続くのですか。 <ul style="list-style-type: none"> 仲間だから「助けたい」。 ことみさんたちがたくやさんに、やりたくない、嫌なことを全てやらせるから。 4 ゆいの気づきや行動から、相手と仲間になるために大切なことについて考える。 ○ ゆいさんはたくやさんのためにどのようなことをしたのですか。 <ul style="list-style-type: none"> 他の友達の牛乳パックまで片づけていることに対して声をかけた。 たくやさんのことについて、両親に相談した。 今のままでいいのかを、翌日たくやさんに尋ねた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「仲間＝心を合わせて何かを一緒にする人」という意味合いを考えたときに、自分たちはまだ仲間だと言いきれる関係にまではなっていないことを捉えさせ、仲間になるためにという方向性で授業に取り組ませる。 教材の道徳的価値について、自分との関わりの中で理解できるよう状況を整理し、それぞれの登場人物の気持ちに共感させる。 ゆいとたくやの関係をまとめつつ、本時はゆいの気づきと行動を中心に考えていくように促す。 児童の言葉を教師が「気づき」と「行動」に分けて板書し、あとの展開につなげる。 「思わず」「思いきって」という言葉や、「本当の気持ち」という両親から得たキーワードなどに注目させることで、ゆいがたくやに心を合わせようとしていることに気づかせ、それによってたくやの言動にも変化が起きていることを捉えさせる。
展開後段	5 ゆいの今後行おうであろう「行動」を考える。 ○ たくやさんの「本当の気持ち」という強い「気づき」から、ゆいさんはどのような「行動」をしたいと思いますか。 <ul style="list-style-type: none"> たくやさんがことみさんたちに話しに行く時についていってあげると思う。 ゆいさんがことみさんたちにやめるよう伝えると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「本当の気持ち」という強い「気づき」に対する「行動」について考え、議論することで、相手のことを考えることがより強い「気づき」を得ることにつながり、それによって行う「行動」も強くなることを実感させるとともに、多面的・多角的な考えにふれさせる。
まとめ	6 道徳的価値に関する発問から、学習を終えた時点での自分の考えを書く。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; text-align: center;">仲間になるために大切なことはなんだろう</div> <ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちに気づき、相手のことを考えた行動を重ねることで、仲間になることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習の前後での発問に対する考えを比べさせ、自分の考えが深まったり、多面的・多角的になったりしていることから、道徳的価値についての理解がより確かなものになったことを自覚できるようにさせる。

VI 授業記録

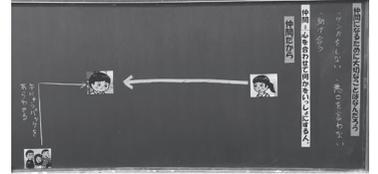
授業の初めに「仲間になるために大切なことはなんだろう」と問いかけると、児童からは「協力・助け合い・思いやり」といったよりよい関係を築くための意見や「会話・積極性・思いやり」といった相手と自分という関係性での意見が出された。そこで、「仲間」の辞書的な意味を紹介し、「この4年2組のみんなは仲間なのかな。」と問いかけると、半数以上の児童が「学級全体では仲間と言いきれない。」という立場を示した。そこで、「みんなが4年生を終えたときに、仲間だと言いきれるような関係を作れるように、教材をとおして学ぼう。」と自小事の課題としての活動を開始した。

ゆいがたくやの思いに気づき、それを解決するための行動を文章から読み取り、板書にまとめていった。どのように思いや行動が変化しているのか、二人の心の距離がどのように変わっているのかがわかるよう、挿絵の二人の距離や矢印の向きなどで可視化していった。また、本文の続きとしてのゆいの行動が考えやすくなるよう、「気づき」と「行動」を上下に分けて板書していった。(右図は構想段階のもの。たくやの気持ちは一度ゆいから離れるが、後にはたくやからゆいへの矢印も出る。最終の板書の時

には、ゆいがさらにたくやに近づいている。)

参観された先生がたとの意見交換会では、「教材の読み取りに割いた時間が長かったのでは。」というご意見や「もっと議論する時間を多く

したほうがよかったのでは。」といったご意見をいただいた。しかし、本教材の続きを考えるという活動をきちんと行えるようにするには、物語としての背景をしっかりと理解したうえでしか成り立たないであろうこと、国語の読み取りとは違い、「仲間になるためには」といった道徳的な課題に絶えず立ち返りながら行ったことから、授業者としては今回のバランスでよかったのではないかと考えている。反面、ご指摘の視点も大切で、教材をきちんと読みこみ、「考え、議論する道徳」の「考え」と「議論」のバランスを教材ごとに的確に設定することをポイントに、本校道徳部では現在研究を進めているところである。今後も実践を重ねていきたいと考える。



VII 当日の板書

The blackboard content is as follows:

- Top Left:** 仲間になるために大切なことなんだろう (What is important for becoming a friend?)
- Top Center:** 心をお互に近づけようとする気持ち (A feeling of wanting to get closer to each other's hearts)
- Top Right:** 仲間になるために大切なことなんだろう (What is important for becoming a friend?)
- Middle Left:** 仲間に入るれない (I can't join the group)
- Middle Center:** 両方の意見 (Both sides' opinions)
- Middle Right:** 本堂の気持ち (The main hall's feelings)
- Bottom Left:** 先生に相談する (Consult with the teacher)
- Bottom Center:** 先生に相談する (Consult with the teacher)
- Bottom Right:** 行動 (Action)
- Far Left:** 心を近づけようとする気持ちをもつ (Have a feeling of wanting to get closer to hearts)
- Far Right:** 仲間から (From the friend)

教科書活用力を 高める

すずき けんじ
鈴木 健二

愛知教育大学教育実践研究科教授

✓ 道徳授業の現状

〈どんな道徳授業をしたいか？〉

子どもの人生により影響を与えるような道徳授業がしたい！

〈その理由は何か？〉

今まで受けてきた授業は影響を与えるどころか、印象にもあまり残っていない。そのため、何かあったときに少しでも思い出される授業をすべきだと思う。

これは、ある道徳のセミナーに参加していた高校生が、「セミナーを受けて、これからどんな道徳授業をしたいと思ったか。その理由は何か」という問いに対して書いた答えです。

小中学校の9年間、道徳授業を受けてきたはずの高校生が、「印象にもあまり残っていない」というのです。この言葉は、道徳授業の現状の一端を表しています。

なぜ印象に残らない授業になってしまうのでしょうか。それは、子どもが知っていることを問うだけの授業になっているからです。知っていることを問われても思考は刺激されません。だから印象に残らないのです。このような道徳授業の現状を変えるた

めには、教科書を活用する力を高めることが大切です。

✓ 教科書活用力を高めるステップ

教科書会社は教師用指導書や朱刷、道徳ノートなどを作成し、少しでもよりよい道徳授業になるように工夫しています。しかし、それらに頼ってばかりいると、教科書を活用する力は高まりません。

教科書活用力を高めるためには、自分自身で教材と向き合い、どうしたらその教材を効果的に活用することができるのかを考えることが大切です。

このような積み重ねによって、少しずつ魅力的な道徳授業をつくることができるようになっていくのです。

教科書活用力を高めるステップは次の四つです。

ステップ1 教材を批判的思考で読む

ステップ2 この教材でどのような認識を変えることができるかを考える（テーマを掘り下げる）

ステップ3 この教材ならではの「ねらい」を設定する

ステップ4 認識の変容を促す授業プランをつくる

✔ 批判的思考で読む

教材を表面的にしか読み取れないと、授業も表面的になってしまいます。深く読み取れるようになると、授業の質が確実に高まっていきます。

教材を深く読み取るために重要なのが、

批判的思考で読む

ということです。

批判的思考で読むために重要なのが、

疑問をもって読む

ということです。

「仲間だから」という教材があります（『小学どくとく4 はばたこう明日へ』教育出版）。

教材の冒頭には、「友達と助け合って」という主題名が書かれています。そして、考えるための視点として、次の二つが示されています。

- 友達が大切だと感じるのはどんなときですか。
- 本当の友達とはどんな友達なのか、考えてみましょう。

友達と助け合うことの大切さを学ばせるために、「仲間だから」という教材を活用しようというわけです。

ここまで読んで、何か疑問が浮かんだでしょうか。

「自分は知っているつもりになっていないか」という意識があれば、次のような疑問が浮かんできます。

「友達とは何か」

「本当の友達ではない友達がいるのか」

「友達は大切なのか」

「仲間とは何か」

「友達」や「仲間」という言葉は日常的にあたりまえに使われている言葉で、児童もよく使います。

実はここに落とし穴があるのです。

「友達」や「仲間」などの言葉は、知っていて当然で調べるまでもないと思こんでいるので、改めて辞典などで調べようとしません。

あなたは先の問いに明確に答えられるでしょうか。改めて問われると、うまく答えられない人のほうが多いはず。しかし、知っているつもりでいる教師は、自分自身が明確に答えられない価値観を授業で扱っているのです。よく知らない価値観がテーマとなっているのに深い授業ができるはずがありません。教材を批判的思考で読むと、次のような効果が表れてきます。

- ① 教材が少しずつ深く見えてくる
- ② 授業で考えさせたいことが見えてくる
- ③ 授業のアイデアが浮かんでくる

まずは、教材を批判的思考で読むこと、これが、教科書活用力を高める第一歩です。

✔ テーマを掘り下げる

批判的思考で教材が少し深く見えてきたら、テーマを掘り下げる作業をしましょう。

テーマを掘り下げる第一歩は、

キーワードの意味が本当にわかっているか
自問自答する

ということです。

この教材でいえば、「友達とは何か」「仲間とは何か」について、明確に説明できるかどうかを自問自答してみるのです。

うまく答えられないことを自覚したら、複数の国語辞典で意味を調べてみましょう。これだけでも新たな認識を得られるはずです。インターネットだけでも次のような意味がわかります。

- 友達：互いに心を許し合い、対等に交わっている人。一緒に遊んだり、しゃべったりする親しい人。
- 仲間：心と心を合わせて何かを一緒にするという間柄を、かなりの期間にわたって保っている人。そういう間柄。

意味がわかると、さらに疑問が出てきます。

「“心を許し合う”とはどういうことか」

「“対等に交わる”ことは可能か」

「“心を合わせる”とはどのような状態か」

「“かなりの期間”とはどれくらいか」

このようにテーマを掘り下げていくことによって、児童にどのような認識の変容を促したいかも見えてきます。

さらに掘り下げたい場合には、テーマに関係ある書籍を読むことをお勧めします。例えば「友情」について書かれたエッセイや小説などを読むと、いろいろな人の「友情」の捉え方を学ぶことができます。研究授業などをする場合には、ここまでやると自身の価値観がさらに深まってきます。

✓ その教材ならではの「ねらい」

本時の「ねらい」を設定するとき最も大切なのは、その教材ならではの「ねらい」を設定することです。

算数の授業の目標を設定するとき、「計算ができ

るようにする」と書く教師はいません。本時でどのような計算ができるようにしたいのかを考えて、「繰り上がりのあるたし算ができるようにする」などという表現にするはずで。ところが道徳授業では、このような常識があたりまえになっていないので、次のような「ねらい」になってしまうのです。

- 友達とすずんで関わり、仲よくしようとする心情を育てる。

このような「ねらい」の場合、どのような教材を活用しようとしているのか、ほとんどイメージできません。最も問題なのは、どのような友情のあり方を学ばせようとしているのかが、全くわからないということです。

そのため、「なんとなく友達について話し合ったよね」というような漠然とした授業になってしまうのです。これでは児童に認識の変容を促すことはできません。

✓ 「ねらい」を設定するステップ

その教材ならではの「ねらい」を設定するステップは、次の二つです。

- ステップ1 教材を読みこんで、どのような「友情」のあり方が描かれているのかを考える
- ステップ2 描かれている「友情」のあり方を「ねらい」の言葉として表現する

本時の「ねらい」を設定する時に、まずしなければならないのは、授業で活用しようとしている教材が、どのような友情のあり方を描いているのかを考

えるということです。例えば、次のような「友情」が考えられます。

- 相手と仲よくしようとする「友情」
- 相手を助けようとする「友情」
- 相手のために自分の身をひく「友情」

「仲間だから」では、主人公の“ゆい”が、牛乳パックの片づけをさせられている“たくや”のちよつとした行動から、本当の気持ちに気づき、行動しています。

つまり、困った様子の友達に「気づき」、解決するために「行動する」ことが仲間になるために大切であることが描かれています。

このように、どのような「友情」のあり方が描かれているかを読み取ることによって、次のような「ねらい」が設定できるようになるのです。

- 本当の仲間になるために、困った様子の友達に気づき、行動できるようにしたいという気持ちを高める。

教科書を活用して質の高い道徳授業をつくりたいと考えているのであれば、いきなり授業プランを考えるのではなく、教科書活用力を高めるステップの1～3をしっかり踏まえることが大切です。

✓ 授業プラン作成のポイント

授業プランを作成するときのポイントは、次の三つです。

- ポイント1 教材に興味をもたせる（問題意識を高める）
- ポイント2 思考を刺激する発問をつくる
- ポイント3 身近な問題として意識づける

特に意識したいのは、教材との出会い方を工夫するという事です。

問題意識を高めるには、題名や挿絵などを活用することが効果的です。「仲間だから」には、下のような挿絵が使われています。



授業開始と同時にこの挿絵を提示して、気づいたことや考えたことを発表させます。そして「仲間だから」という題名を示し、「この5人は“仲間”だと思いますか」と問いかけます。

このように登場人物の人間関係に対する問題意識を高めた後、教材と出合うのです。こうすることによって、その後の授業展開での発問に対する考えも深まっていくのです。

思考を刺激する発問をつくる時に意識したいのは、「知っていることを問うだけの発問になっていないか」ということです。授業の終末は、児童に身近な問題として意識づけ、日常生活に結びつけていきましょう。

多面的・多角的に考える道徳授業

KJ法と板書の構造化をとおして

すずき かずよし
鈴木 一禎 静岡県浜松市立伊目小学校教諭

1

道徳の授業において、多面的・多角的に考えることの意義

学習指導要領解説には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる」とある。また、その指導として「物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解を基に考え、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組む」ことができるように工夫することが求められる。

そこで、付箋紙をKJ法で類型化したり板書を構造化したりすることによって、児童が一つのテーマに対して、より「多面的・多角的に考える」ことができるようになり、多様なものの見方や考え方にふれることができると考えた。グループでKJ法を用

いて自分たちの考えを類型化することは、他者と協働しながら多面的・多角的に考えることに適している。また、全体での話し合いでは、グループ以外の児童と対話しながら価値について考えを深めることができる。その際、板書を構造化することで視覚的に多様な考えにふれることができると考えた。

2

「人生を変えるのは自分——秦由加子選手のちょう戦——」での実践

本教材は、秦由加子さんがパラリンピック出場を目標として、その夢の実現に向けて生きる姿をまとめた話である。彼女の生き方にふれ、感じ、考えることで、自らの夢を追い求める人の生き方と強さについて考えることができる教材である。

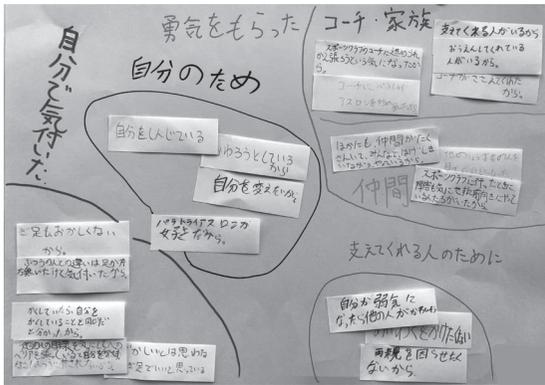
指導にあたって、彼女のひたむきな努力を支えているものは何かという視点をもたせて考えることで、一人のアスリートとして夢を追い続ける意志、大会で好成績をあげた時の達成感、彼女を支えてくれる家族やスタッフとのつながり、障がいや心のバリアとせず他者とつながって生きることの大切さなど、多面的な価値の観点から話し合いを進めた。

主発問を「秦由加子さんが人生を変えることができたのはなぜか」とし、グループで話し合う際に、付箋紙を活用してKJ法を用いた。付箋紙を類型化する中で、他者の意見との共通点や相違点に気づかせ、自分の考えを広げたり深めたりすることをねらいとした。(資料1)

まず、話し合いに入る前に自分の考えを書く時間

学習活動(○主な発問)	
導入	自分の夢や目標について考える。 ○あなたの夢や目標は何か。
展開	教材を読んで話し合う。 ○秦さんが人生を変えることができたのはどうしてだろうか。
終末	価値について自分の考えをまとめる。 ○夢や目標について、今、何を感じるか。

資料1●学習展開



資料2●グループAの付箋シート

を十分に確保し、自分の考えが明確になった状態で話し合いがスタートできるようにした。次に、グループで秦由加子さんが人生を変えることができた理由についてKJ法を活用した話し合いを行った。児童は一つ一つの付箋紙を画用紙に貼り、関連性のあるものを近くに貼ったり、ラベリングしたりして類型化していった。

グループAでは、「家族の支えがあったから」「コーチの勧めがあったから」など周りの人たちの支えがあったことや、「スポーツが好きだったから」「スポーツをやる喜びを見つけたから」といった自分とスポーツとの関係、「障がいを感じせず、スポーツを楽しむ仲間がいたから」「普通の人と変わりがないと気づいたから」など障がいを感じない強い意志をもったことなど、さまざまな価値について取り上げ、類型化することができた。(資料2)

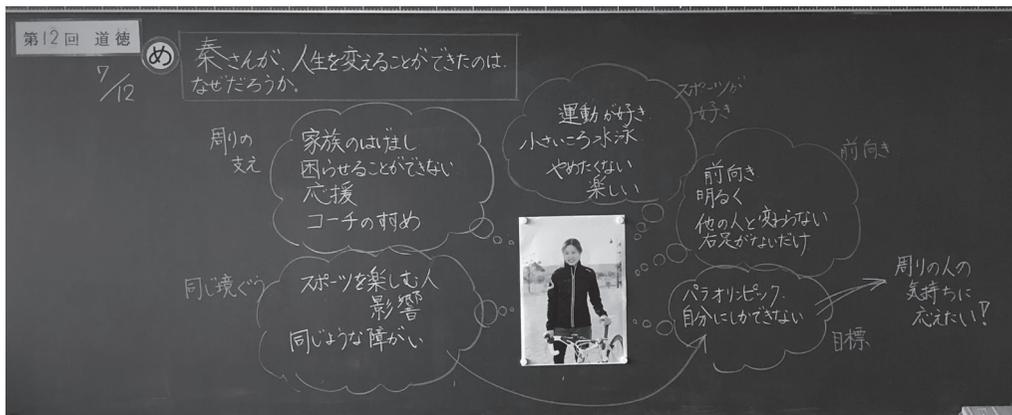
全体交流では、グループでの話し合いをさらに広げられるように、対話しながら板書を整理していった。「パラリンピックという目標をもつ」ことや「同じ境遇の仲間がいた」ことなど、取り上げたグループAにはなかった考えを、他のグループの児童があげ、多様な考えを板書で整理することができた。(資料3)

終末の振り返りでは、グループや全体での話し合いをおして考えたことを再考できるように「自分の夢や目標について、今、何を感じるか」また、話し合いで広がった考えについて取り上げるために、「友達の考えを聞いて『なるほど』と思ったことは何か」という二つの視点で振り返りをさせた。

話し合いの後、導入で想起したことと同様の視点で振り返りを行うことで、児童の考えの変容を見取ることができた。また、なかなか付箋紙に理由を書くことができなかった児童もグループで行ったKJ法による類型化や、全体交流で対話に参加することで、多様な考えと出会うことができた。(資料4)

私が思ったことは、前向きにチャレンジすれば幸せが来るということです。秦さんが、右足をけがしてもチャレンジしたことは、すごいと思いました。友達の意見でなるほどと思ったことは、周りの人の支えが大事という意見です。たしかに、家族やコーチの言葉に支えられていたと思いました。

資料4●B子の振り返り



資料3●板書

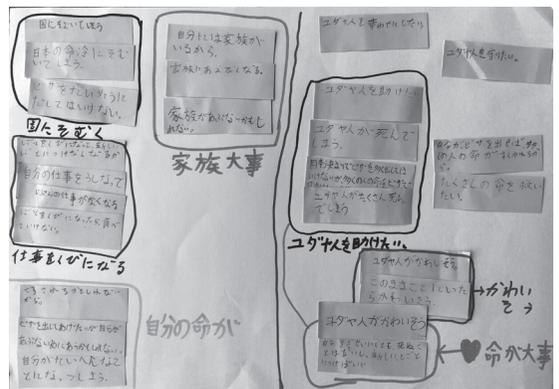
3

「六千人の命のビザ
—杉原千畝—」での実践

本教材で取り上げたい価値「よりよく生きる喜び」は、新学習指導要領で新しくつけ加えられた内容項目である。人間は、よりよく生きようと努める反面、誘惑に負けたり、やすきに流されたりするといった弱さもち合わせている。そこで、人間の強さや気高さを理解することで、誇りある生き方、夢や希望など喜びのある生き方につながられるようにした。

本教材は、第二次世界大戦中という状況下で、一人の人間として愛と人道に生きた偉人である杉原千畝の話である。外交官として自らの危機や困難を承知のうえで、迫害から逃れるユダヤ人に日本通過のビザを書き続ける選択をした杉原千畝の生き方にふれさせた。

指導にあたって、杉原千畝の葛藤場面を取り上げ、その理由を話し合わせた。教材を分割して提示し、自分かもし杉原千畝だったら、「ビザを出す」のか「ビザを出さない」のかを話し合わせることで、葛藤場面におけるそれぞれの道徳的価値をおさえることにつながる。また、KJ法で理由を類型化する中で、

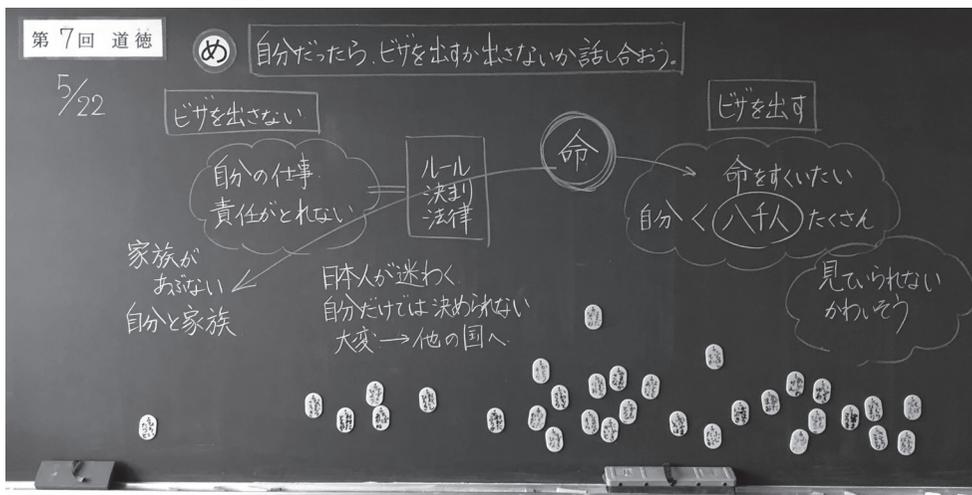


資料5●グループCの付箋シート

主人公の迷いを多面的・多角的に捉えさせ、決断の難しさに気づかせた。

その後、教材の続きを読み、難しい状況の中で「ビザを出す」決断をした杉原千畝の姿にふれさせた。

付箋紙に理由を書きこむ際には、ピンクの付箋紙に「ビザを出す」、青の付箋紙に「ビザを出さない」と色分けし、どちらかの付箋紙を選ばせてその理由を書きこませた。早く理由を書き終わった児童には、逆の選択ならばどのような理由になるのか書きこませ、多角的に考えさせた。その後、付箋紙を類型化しながらグループで話し合うことで、共通点や相違点に気づくことができるようにした。(資料5)



資料6●板書

グループの話し合いでは、「ルールを破ることになる」「国にそむくことになる」という規則に関することや、「ユダヤ人の命を助けたい」「大勢の命を助けるべき」という生命に関する事など、さまざまな価値を取り上げてまとめることができた。

全体交流では、ネームプレートを活用して話し合いを行った。黒板全体を「ビザを出す」「ビザを出さない」の二つに分けて、ネームプレートを自分の判断したほうに貼らせた。そして、選択した理由について板書に整理することで、葛藤場面における多様な価値について、多面的・多角的にまとめることができた。対立する二つの意見の中で、どちらかを選べないと、真ん中にネームプレートを貼る児童が多かった。「自分の家族とユダヤ人のどちらも命がかかっているから選べない」などの両方の立場に共通する価値について迷っていることを全体で取り上げることができた。(資料6)

板書を整理した後には、教材の続きを読み、杉原千畝がどのように判断したのか、その姿にふれた。そのうえで、「杉原千畝さんのすばらしいところはどこか。」とたずねることで、価値についてまとめ、振り返りをさせた。(資料7)

4

成果と課題

グループでの話し合いでは、児童が一つ一つの付箋紙を動かしながら分類したり、ペンでラベリングしたりして自分たちの考えを類型化していった。KJ法を使って他者と協働することで、自分の考えと他者の考えを比べる必要に迫られる。このように、KJ法を使って付箋紙を類型化することは、他者と協働しながら多面的・多角的に考えることに適していた。(資料8)

全体交流での板書も同様である。児童と一つ一つの意見を類型化しながら整理していく。そのうえで、まとめた意見をKJ法と同様にラベリングするこ

とで、それぞれの価値についてまとめることができた。対話によって交流することに比べると、視覚的にも整理され、多面的・多角的に話し合うことができるのではないだろうか。

その一方で、それぞれの交流で時間がかかってしまうという課題も出てきた。児童が付箋紙を分類し、ラベリングするKJ法は、時間がかかってしまう。そのため、全体交流を取り入れての話し合いでは、振り返りの時間を十分に確保できなかった。

また、児童に話し合わせるだけでは、価値についての深まりがなかったことも課題である。価値に対して、より深い考えをもつためには、教師の介入が不可欠である。今後は、多様な価値観にふれさせるだけでなく、価値についてより深く考えられるように全体交流で教師がファシリテーターとなっていくことを目指したい。

私は、初めは真ん中にネームプレートを置きました。でもみんなと話し合っ「ビザを出す」ほうに意見が変わりました。理由は、その救った六千人のユダヤ人の人が、自分のように正しい判断をされるかもしれないからです。みんなで話し合った中で、見て見ぬふりという意見が出てきました。たしかに、自分のために見て見ぬふりをしたくなるけれど、私は勇気を出したいと思いました。

資料7●D子の振り返り



資料8●KJ法で話し合っている様子



第16回

まもなく締め切り!!

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2018年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2018年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

- ◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
- ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
- *協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



「地球となかよし」事務局 TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



地きゅうをまもっている木

この絵は、人間が作り出したわるい空気を、木がきれいな空気にかえているところをそうぞうしてかきました。大きな木の中に、うちゅうがあり、そして、わたしたちがすむ地きゅうがあります。わるい空気は、水を多くふくませてかきました。

小学道德通信 はばたこう明日へ (2018年 秋号) 2018年8月31日 発行 表紙イラスト:みずうちさとみ

編集:教育出版株式会社編集局
印刷:大日本印刷株式会社

発行:教育出版株式会社 代表者:伊東千尋
発行所:教育出版株式会社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864(お問い合わせ)
URL <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2
あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のっとり、配布を許可されているものです。